

なにかわたしの世紀末が訪れたようなつらい毎日だ。二十四日に熱が出て、家庭医の横田医院で抗生物質を貰い昨夜まできちんと三回ずつ飲んだ。熱はなんとか下がって来たが、痰と鼻水がひどい。そこへ二十七日に狭心症を起こした。横田医院で心電図を撮った。いつもは短い時間の計測なのに、えらく長いなあと思ったら「乱れてますねえ」と先生。循環器専門なので信頼は大きい。これまで痛みが耐えられないような時、「心筋梗塞ならいいのに。バイパス手術でもなんでも受けてこの痛みから解放されるなら」と倒錯した心理状態になって心電図を撮ってもらい、先生も「ハイハイ」とこちらの言うようにして下さった。もう何百回も無駄に撮ったが、一昨年秋に治療を請めてからは、そんな狼少年の行為ともサヨナラしていた。だから去年の六月以来の心電図だったが、グレーゾーンよりちょっと危険水域に入ったらしい。

ニトログリセリン(普段も財布と枕元に用意している)を一錠舌下に入れ、三十分して再計測したら、図形は少し改善していた。でも心筋梗塞ではないから、処置は別がない。今後も痛みが起きればニトロで有めるしかなさそう。心臓の状態をはっきりさせるために五十四歳、六十二歳と二回心カテーターを受けている。直前検査の一つ、自転車漕ぎで「クロ」のためだったが、カテーターでは「OK」だった。そういう経験があるために、二十七日は先生も精密検査をやるうとは言われず、わたしももういやと帰宅した。

持病の痛みは一分も立ち止まってくれないから、狭心痛が収まっても、地獄の痛みには変わりない。変わるとしたら「もういい加減にしてくれ」の自棄がさらに深まったことだ。気分が落ち込むと意識はさらに痛みに行く。厄介なことに「あつ、また狭心症かな？」と過敏になる。さつき京都のマンションに居る節夫に電話をしたが「ほかに意識を逸らせて」の言葉が終わる前に嫌になって切ってしまった。彼にしてもどう対応していいか人智を超えているのだ。申し訳ないと思いつつ電話をして、さらにいらつく。悪循環。今ふいに「入浴しようか」と思いつく。十日間入ってないのは体調のせいだが、日常で一番の苦痛は入浴。両手が上げづらいので洗髪が嫌だ。背中までタオルが回しにくい。湯船をまたぐのがつらい。いろいろあつて敬遠しがち。その苦痛に自分を投げ込んでやれと思ったのだ。でもすぐにこんなにしんどいに入れるわけはないだろうと、自分に言い聞かす。こうやって、出来ないことが増えて行くのだろう。

本来なら今日は幸多朗の通う茨木市立彩都西小学校で二十五日に行われた「紙飛行機で遊ぼう会」のことを書くはずだった。一年生六十五人が紙飛行機を作って飛ばし競争をする総合学習だ。ポランテアで指導に来て下さったのは、C.V.V(シビルベテランズ&ポランテアズ)という主として土木の仕事に携わってきた方々七十六人の集団の有志である。メンバーの一人、金山正吾さんが高校同期生なのが縁で実現した。その実現に至るまでとこれからについて書くつもりだった。でも他日に譲る。もつと晴ればれとした日に書かねば勿体ない。幸多朗は十一メートル飛ばせたそう。

鬱々と終末時計冬籠る